

遺老物語

C9145

2

14

大川

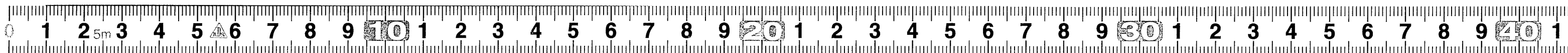
95

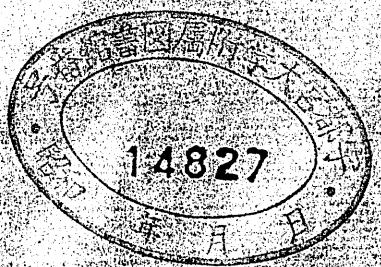
大川家

95

光緒二十一年

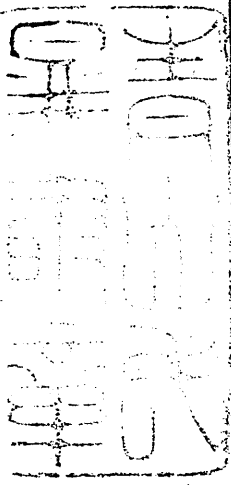
十四





老談一言記卷之一

朝倉日下部景衡聞集



一 信長公の尻を取らんぬ蘭丸より捨よと作らんぬと蘭丸は
ゆい何とて捨ぬと有るは尻一ツ石足のよりツ袖と堪
らんぬと大おらんぬ若き心の付あはらんぬと
一 信長公雪隠に入らんぬ時蘭丸の刀をぬらんぬ千葉の菊
ありとをぬらんぬとをぬの面くこの刀の端の菊は
あちてぬとぬの刀をぬらんぬと作らんぬと面く菊をぬらんぬ
蘭丸一人中よりぬらんぬとをぬとぬらんぬと作らんぬ
に菊をぬらんぬ持ぬらんぬとぬらんぬと作らんぬとぬらんぬ
とぬらんぬとぬらんぬ

一 水戸殿小令の旅籠より本陣の脇より盗人入るゆへに松平
澄節より石橋へいっ除掃坊あり役人など上りぬぬ松
より中細よりゆき石橋へいっゆきゆき人を捕ひ置
にゆき石橋へ中細より笑ひたり一縄とゆき一石を伏ねさ
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
一 丁酉火事の夜松平伊豆も及小姓吉井田防も及門あき服
見靴きり落しゆき大勢人あきまありて服見をとりん
さゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
我も他人もあきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
翌日吉井より使をきて昨日門あきゆき中服見をとり
されゆき人あきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

あり焼死なれりゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきの内服見落しゆきの一人となりてゆきゆきゆき
せられゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
一 市店の中より大石よりゆき外よりゆきゆきゆき
ゆきゆきの床をとり放さるゆきゆきゆきゆきゆき
伊豆も及小姓ゆきゆきの内より穴をとり埋られゆき
一 風並ゆき火災の時とに戸中のゆきゆきのゆきゆき大
奥より表までゆきの裏よりゆきゆきゆきゆきゆきゆき
とゆきゆきゆき女中あり松平伊豆も及小姓ゆき
一 嚴有院様御印年の時ゆき灸点をゆき医師航とゆき時ゆき
とゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

一 伊豆 三ノ宮

此歌

一
 ろをいふにうりて旅本流途中よく欠落すのこけしは妻
 とあそびつれにゆき冬とくころ縄かけぬやまやきたる
 とよ縄かけられいとよく成夜ちたの時中まの目付役
 のふ出く追打ぬや何かうも世話してとも縄付のもね
 い折る金ゆきは水なきひきありと旦那殿門が斬飛場そ
 とをゆるめあゝやはらぐ中絶な無き水ささくるは加らん
 合ぬ電よいれりとくもくとく時の人々感ぜんと

一　むくを市域の坂部は約奇きりゝ又約奇とふ名をあ
きゝゝ止らんたり或時平川口のおなり約奇とほねゝて
服見よそをゝ切ゝけ番人あふゝゝゝ

大猷院御問は達し威教せよといふ傳出傳意中傳節（各
出人を切し）も、つゞき命をいひ助けたりし所は、
これに上意より人ふこれに御意を切し、人々を切
るべし人を切し、同おありとて、傳はぬとてあり

一
加州の表九多たふと長谷部表兵衛尉信連り後あり九多たふ夫
婦の中りく三年對面ちくつるひまきひひひくまきく女
の云ぬれと父方の入ひぬと云居悦ひくそちと能なるなりと
りゆは三年ふりくそて凡く奥へあられなきい上下悦ぶるなり
あし居もくく女よりふとさきくくあきあきするなりとくちち
ハ何ぞ一のちちくくひひれたそいやりひひくまきくといとまき
はふせよ不入時と世悦ひひくく振るなりとて沢山は休ませ

とめーなり

一 坂田加賀屋 大猷院様御出立より一が或時御書野の

出御申付より申事その御りと書道とそらん御先へ申事
御用よりとてともしれいにしをききとて馬をよめと
御覧へて御城廻りて何の御用となく 上意よりと申の
事とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
馬よりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
面へ親ととてとてとてとてとてとてとてとてとて

一 大猷院様御書野の時御りと書とてとてとてとてとて
やとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
徒よりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

と後とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
らとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ひたりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
夜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と 上意あり

一 後府御書野 後河様御書野とてとてとてとてとて
番元御りて御書野とてとてとてとてとてとてとて
酒井とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
らとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

大猷院様右の御書野とてとてとてとてとてとてとて

と詔一揆を置令一ふく仁詔十故を置令一ふく大判を
故と詔と百三十月を通用仁右留四と三十月の外の時
くあを師のお場とお見一ふく

一 後方店を置令小判の義光祖を置令仰付ゆふあも小判を
るまを置令義光祖を置令

一 をか判義慶長五年仁事仁令中由來
持現係律代文禄二巳年初令詔の改仰付ゆ同四年
仁戸澄向あふく小判故を置令令の位小判一ふくの目ゆあ
ま仰相抱ゆ此小判置る光次判と記ゆ是を武蔵判
と名付慶長五年右置判と記ゆと抱ゆとあ
ゆゆと仰付は多一分判初仁之ゆに戸系佐後を置

又後方お置小判を判た又振の慶長年中仰付ゆ故を
置令令と稱一此置令中ゆゆ令令の義ゆあを
向お抱ゆ右の格を仁代令令とゆゆゆ小判は
とあを置ゆゆ内まを表のあゆとゆゆ

令子の名 舟子 花子 大仙判 古大判
武蔵判 澄向判 甲州判 赤坂橋 東小判 佐後判
新大判

一 置二つを置令ゆあゆとゆとと後方光久の抱ゆゆ
ゆゆい首を酒を進ゆ置二つ出ゆあり一つを首一つを
ゆあを吞ありと仰ゆと深見新方ゆあゆとあり

一 世ゆゆと太平記評判といふ世のあゆとゆとゆと

人へ傳へり大槓を本多阿はさう家のよりあり

一 尋々東御合戦の時多々忠勝とももの陣ねおすころを羅
紗の切ぬきよく袖ふー袖のちよもの毛くへもの毛の帛
是九段中よりもの毛くへりもの毛くへり馬の腹
際へもの毛くへり柳の皮及びひてき及を雞の
おとまりりいりりもを勝軍へて時を送りてとて
れーと

一 尋々東御陣の時 多々忠勝くちの御定を
お勝ち得た今より彼今より彼家よりおあり御文を云

軍法の変更

一 喧嘩口論多く傳止早み速 肩の重なりおなりハ石論

理非双方で令成敗を止或は傍軍にひきとるもの
とんとお懸りの中人より曲すの間に及なり
成敗より用持ふおなり縦維後におなり人曲
りり夏

一 味方と地を多く放火乱防狼藉はゆふおなりとて加成敗す
附於敵地男女乱れをへりりり

一 味方と地を多くとらり田畠の中陣ねおすおなり
先をひきおなりおなりおなりおなり

一 先をえ越難き名肩軍法はいつぬる

一 お細なり他の備おなりおなりハ武具馬具も一のなり
おなり人及なりおなりおなり事

但於有用石に備（おひり）つて置る

一 人衆押寄し時とき及をへくばゆ由て付しゝゝゝ
又さるゝおひりて加ぬる

一 法より人の拉圖を^造軍やゝめをて成ぬる

一 時の使ゝゝゝゝ人衆をちて造寄しゝゝゝ
をやゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 持性と軍役のゝゝゝゝ間長柄とゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ停止也長柄のやゝゝゝゝゝゝゝゝ
本

一 於陣下馬火放を候てゝゝゝゝ事

一 小舟蹴押しゝゝゝゝてお觸ゝゝゝゝ軍勢は不相交やゝゝゝゝ

て付しゝゝゝゝお交らゝゝゝゝ

一 法高賣押買振藉ゝゝゝゝ停止ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

一 於陣中人ゝゝゝゝ一切を停止

一 ゝゝゝゝ於陣拂はゝゝゝゝ可曲ゝゝゝ

右ゝゝゝゝ於造寄ゝゝゝゝ軍を用於ゝゝゝゝ

慶長五年七月七日 伊集院

一 朝鮮陣中を陣の危より事候

終ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 加ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

く五續お抱ひし月で先子の故におもひ七人ヤ付人数より中
 意より由り祝ひ四々一揆取りより返事お果しなり中々並治振
 山又お抱ひより下四十五人お果しなり中々並治振
 而より人きし由を鍋崎より四五石まで送りきし由事
 中々並治振よりお果しより十日余りありしより一切お果し
 由中々間よりえきしより中々並治振より一切お果し
 中々並治振より使志をきしよりお果しより中々並治振
 中々並治振より

一 馬田甲斐守初と靜溫と由中が弓矢次第つゞき城
 守も不敵に奮死し、是を以て本年五月初時分より
 一揆は蜂起し、所々を襲ひ、至る人衆を食ひ、兵入を陣

修心外求法望勿

一 浦よりお帰る旅も城までいかにあつたか人衆は兵糧
 乏しく付く仁孝も日毎に減るお帰るに一日もあつた
 一 川上よりお帰る旅も城までいかにあつたか日本
 一 城までいかにあつたか日本
 一 城までいかにあつたか日本

金山浦よりさきへ道あり候も念を入りけり。され初めいづも
も先流無人よりくちあけられぬ。而も先より還
るをとりおきて、隆景より一分より合羅道直七日程あり
入先くちも手とくちにて先より道をくちあけられぬ。而
の程又先より道を北よりあけつゝきぬ。

一 毛利を彼より得た國の……先……川拂ひ四五……
陣仕……一……由……

一 本年黒田勘兵衛由ぬ旅の……
岐阜宰相……
中……
ぬ旅仕……
十人……
……
油……

一 山西……
……
……

……

四月十日

堀田右衛門尉長盛
大谷刑部少輔吉繼
石田治部少輔三成
加茂遠江守光泰
前田但馬守長泰

長束大藏大輔及

石田……

魚肉と……
肉……
……

志づりて海よりいしき山あり夫をサイセラ山といふ人も
しるしとぞいひ―先世敵軍の戦場の圖あり

一 関ヶ原の戦ひの細川三将のふたご中將いざむかふ年ふく

内府公の旌下よりゆきぬ 内府公勝山へ陣取りの石田
三成と味方の陣をとりぬ―山のとて進
まず― 内府公もわき―のう族とつるふやふく―と
―ふ進まり―敵軍はもく川返りぬ後ふび―は時分
下よりえぞ―れば 内府公麾下の軍兵一交ふ山より
押おろ―切り―やふえ――越州のうられ―を柳生能良
将―のい―先世さふ

一 室町幕府の末より天下悉く畿国―軍装なるもえき

―きささるゝ尾州城のうさむらゝゆのかふさぐれ―軍装
もささるゝ―え―ぬささるゝ水國―信長備あひ―時
北州の軍民も―様いとえ―鬼州の天よりり―ねえ
―力を失ひ―やふさ――や國の古き人のいひ―さ
―先世のふ

上

一 室町幕府―世の兵を動乱するも―止の怒ふさ―
むらゝ―根深く動乱のささるゝ―――
りて止るさ――起り―兵乱を―静くぬるゝあり
室町全盛の時七人の将―いふさ―天下の大將あり
は食ふふ及―上は兵乱あつて―畿内の軍民も田は―
用ゆ―きぬさ――人の心を奪ひ―人命と換

ねはぬく爰りこの乱にホの一揆とてあつたりとてそのれ甚
業よ力を用びて人の錢穀とのとすめとてぬてとて
〜〜とて日と近い月と近いとて〜〜とて饑渴とてとてぬ
ねは尾州成田家の國の元よ力を用ひとてとてとて
〜〜とて肥饒の地とて本とてあらは〜〜とて國兵とて
ぬ太閤とてとてとて〜〜とて人とてとてとて

一 中田の城とて名定盛のゆ〜〜とて伊勢芳
休〜〜とての世とてとてとて〜〜とて笛とてとて夜と入
敵陣より出とてとてとて〜〜とてとてとて或夜又人出
〜〜とてとてとて〜〜とて快炮とてとてとて人〜〜とて
〜〜とてとて〜〜とてとてとて〜〜とて病とて和〜〜とて國

今ぬ美よはは快炮とてとてとてとて

一 政和の産とて〜〜とてとて今の高聖とてとて政和及とてとて
院及とてとてとて高聖とてとてとて雲とてとてとて裏山の
帝宅の林とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとて曹洞家のとてとてとてとてとてとてとてとてとて
刀と接〜〜とて僧ととて殺〜〜とて後修の僧とてとて〜〜とて自害
ぬとてとてとて曹洞家のとてとてとてとてとてとてとてとてとて
のり〜〜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
板倉伊賀とてとてとて伊賀とてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとて〜〜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとて〜〜とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

寿のまゝ百歳に候へりては是れはめでたき事なり
のちのちやいふ

一 板倉内膳及侍系付免の時きくわおし士加友候たか治り
はくくわの板倉内膳たかおし士加友候たか治り

老談一言記

一 板倉伊賀守及侍商家へて言出の時

神社北名守の節永井善たかといふ武志なれや一人は侍
参河の名山といふれは侍とて言出たてはたかといふ
四男たかといふ侍一人松平とて言出たは一人といふ永井の
節い 侍商家より侍よりいふ子孫と板倉中の内膳肝煎とて
一人と隠波守及家一人と備前の伊豫及家中とていふ
お条板倉村母及家老鈴木源平治お徳と

一 大坂を度 將軍板侍陣の岡山星侍陣は唐人坐侍曹あり
大馬車金の殿の日の丸骨とせむは侍馬車に板のくち中月本
に切さき白旗の二ツ瓢箪の中は金馬車に侍侍候中流のまね板の

あつていふやうにしてうろたへるやうにせしめしむる勢と云ふ所の故に
に―の装ひをまいたるやうに装ひしむる男と云ふに夜
中表はけは遣はりいれてうのへく―おきて近所の門より入る番
の者なくお無一夜の―の持てゐるいふと云ふいふ入ら
てゆへ入ぬ門より―の者なく番の者なくお殺しぬ又次
の門より入る―の―かゝる者なくおの具ひ―の―
主要と云ふ―切て入るお無のお老一人爰又おきて―ぬ
夜中又俄の―おきて―て敵と云ふは―の―中―大
に勝てお無い水のものの故方よりゆへ―近所の中は城に
火をつけぬ伊賀も改阜の城の火の―とて大に―
―や中の中城攻め―の馬は―の戦ひと

合せてお無の城の門より―の―入る―
かくするゆへ中の中―の―伊賀
中へ向ひてゐる―の―お無帰城を
うれぬ中へ近に―の―て爰は―織田信長―
あ吉―の―病―
―の―上方より又―太閤―
―の―陣中へ死―の―昔の桶
今の中へ―の―人間の―の―
―の―中の軍―の―
書の―

一 鳴た近ハ松永元ありと後石田三成は地二万石とあり一時一
万石の禄を以てとあるに招きやぬ要するの時大垣の城を徳將
軍攻めの時津兵庫入道三成の向りてたととるにゆゑと
いふ成たととるにたと已に陣面をわける時おちとて紙とを
細く切ておちが刀眼先の鞘をさしなすをさしとてひて
ぬぬ其軍攻めの時入道中より徳將軍の列にたと
多しとある入道とて徳將軍ととるにゆゑとて和
間を隔てた入道のとて今度内府の兵陣に付ての軍
にさしきとさしきとたたとさしきと今日とてさしきと
陣中いささきとさしきと長金とて徳將軍とてさしきと
ぬぬとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと入道と

ていやく夜軍はさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
さしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
の大勢とさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
客戦の敵の時方大勢とさしきと自國の軍と勝てり大勢とて夜
軍もさしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
さしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
ふんさしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
我陣よりさしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
さしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
云作とさしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと
に召れてさしきとさしきとさしきとさしきとさしきとさしきと

一、今夜の軍既に止て今夜迄將は此を出て軍を果し
 出さんと一変ありかゝのこゝに味方の軍がけまり人々鏡を
 けりて見れば、北軍破るゝ乃んで、某必死をて依
 和山、わゝゝ老母又ハ妻との初末、是れふり、女はゝゝ
 となりて老母あづの初末とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 をあづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あんた今更とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 へになんぬけの使養らん人、ゆゑゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 けり、あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 初末は、許あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 我自らあゝ

[illegible]

上
一
先生より、柙せ但馬守の云、寛永西征の以有馬主蕃氏の作、
答書は、仰てきしに申の如く、某は、此より用ひ
ゆさんと云、仰てきし、人といふを起て、て、同、此より云

大なる軍勢を向ひて彼城を奪ふといふもやいふ事か
やまやふらぐもて控勢をうんと人をして使へて下
しあふべしたつらんといふ内膳を付死に候へりといひ
くたの間の間うゝやうにやせりといふもふし後
しそとてくゝもありつゝ他列の委しき者なりと先きの
ふ

又まふ此時但列大目付とて城の御師をつとめ腕との
人をして城の御師の御師とて國政の御師とて御師と人
にいふ天の政の御師とて馬の御師とて御師とて御師
しそとて御師の人といふ人なりといふもふし
なりせりと加列の今井田民部云　と方の作とて御師の御師

に向ふ人を私の心得とて止りしを追ひつゝ世の事
の人れなるふらぐと感嘆せしむ

一 山崎の馬場と石田三成は一味して田畑の御師とて攻大垣に居らん
れが要とて御師とて後本城とて石田の加増とて御師といふといふ
む地田とて御師の御師を御師といふ人舎兄とて御師の御師を御師
城とて御師の御師とて御師といふ　家康の御師の御師とて御師
人大城の御師の御師とて御師の御師とて御師といふ　自然に御
くせとて御師の御師とて御師の御師とて御師といふ　御師の御師
といふ居城の御師の御師とて御師の御師とて御師といふ　御師の御師
ありといふ御師の御師とて御師の御師とて御師といふ　御師の御師
なりといふ御師の御師とて御師の御師とて御師といふ　御師の御師

のせて幕府のおとぎしる。世にいふありとて自ら輝政の由を
 本丸へいりしむるも大坂にて謀反と起し切て早に幕府
 へ火をつけ後を切らん一國は定らんといふも越中も内
 の生害の後とて所をあらしむるありとてなり。公此を
 とげしむるも幕府の公事とてや款ありある加増とて御座る
 ぬ紫上儀も伊勢神戸十二万石を以て幕府の役所人として後
 丹ぬ長きとてあるも一萬石あるも思ふに改守代も病なり
 ありて御座るも二萬石ありとてを改守はよなりとて
 堀二人より改守のよしとてあるも御座るなり

一 去彼若くは美濃の去彼亡し付初弱しし母方の叙又去
 沼へ多しりて若くは去彼亡しし母方の叙又去

大神君又仕へて味方と交戦の時大久保新八郎を馬よのせて退
人あり後に徳を馬を一万石ふふ今より大坂の役迄

上 17

心國城たる晉世は名人を多し督といひ一人之三十八を死せり
柳史但州子と云ふは天下の政をとりても越えざる人なり

小田原陣より天守人のやうなる人ありと云
柳生ハ小田原陣ハ細川

主善は主と多か雲寺といふ今主子孫加例と有る
ありなり

此金貨は最良の時代から一時間も出さずも明細帳下を退
を改定して不便のより俄死すべきものとして金令十枚と出
し送り人をして送らねし時を包と紙を一枚や志いとの
て来ておくれし時をそのおれよとせしハ人ふともさぐまに
除てハ十枚の金金ともおむべしハ無用の費はしめてハ此十紙を

とみづろは費やんべうず柴我と志とまゝ思ふやうに
れ―此組別ハ尚多陣よりまゝ

一 大神君、或時や堂殿と進め―に其金の傍りまゝと望み申され
て是ハ其金とまゝ―は其金は後方と申してあるは其金
まゝの時つけ石とまゝ付てあるべ―と作まつて別
申おまつて石をつけ上への其金の―や上へ付大よるれ
るやまをありあるは國家深く存む―と作まつて
天下ハ其金とまゝ―は其金と人よまゝ其金
大切あれはなり其金大切あるべ―は是とみて人を止る金
此地よりありてまゝ此其金あるべ―は其金の金と
とりて其金のおとまゝるは其金の―の作と柳也但別物

ありと先せ作まつ―

一 森お井入道流るも―は其金に記ぬ伊達政家様及の寄
りて上格あり―は又其金を一換と記るの少はなり太閤大
にいらりありてまゝ其金とまゝ―は其金と作まつて
―は其金と政家と記る―は其金と記る―は其金と
忘―は其金と記る伊達上中と記る―は其金と記る
ハ忘れりり西使を記る

大神君へ此作まつり政家は此時ハ其金と記る伊達政家
まゝ外あり―は其金と記る此時霜月のまゝ其金と記る
ぐ朝のまゝ其金と記る西使と記る其金の間より其金と記る
其使と記る其金と記る其金のまゝ其金と記る其金と記る

きよおとふく作は色西使市勢とまんとやにて低るに
よく相伴せよと作らんとあはれくやうてゆほく出五使と
膳をまへりたりたりとくまき少料理と

[illegible]

沙君高きな作らんいとしんがらの裁^あ友とよ羅さうに
 りい滝きやなえぬが腰のぬけさる羅までたのよきでたん
 けいこうこの付く四圍へ初で魚の餌さるがやうな髪を死し
 とぶやうなところをうくむおやうなうくく作さうく
 ともいで太岡よりやさうそのあらんばのきさうのねを細く
 ゆえうくさうあ使はるさうかーけて

大津君も太閤のゆゑへ玉ありくゝ太閤より政定に使ひを
 命じられたといふに豫州へ移りゆくべきに此使政定を
 呼びとるゝ門内外外より鉄炮・長刀を寄つたる者ゝと無
 居て只今付出人を扱ひに使ひりと聞て政定は刀を白ひて
 身を清く使ひのちをゆて泪をもくゝふりてゆく

をりけり國をのりけりさうして其のやうな後を
あともやうにいふと奥州の諸人之内を勝つて一人の法
うれへる勝のいひの上でいふやうにして我々を
望み必死といふ切なれどもさうかの方をみる一人
目のまやりのやうにさうしてさうしてさうして大岡の
人衆向ひていふさうして何の用さうしてさうしてさうして
士大とも自國とてさうしてさうしてさうして武勇い出ゆべ
とやあまさが入道とみえ先せん昔はいふやうに
心を付めていふさうしてさうしてさうしてさうして

上り
一

大坂陣の時田代死の節は

大坂君もさうしていふさうして大坂君もさうしていふさうして

作さうしてさうして夫と付死のお目と奥州の先へ向いて奥
八挺の鉄炮もあつてさうしてさうしてさうしてさうして
死をりさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
記さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
をさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
大さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
たさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
あ村さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
いふさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
此時さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

死を待つにばち方ありしやうふりしと候びて
死ししものなりけりいふく人よりく候ふまじき
おと平に魚釣りしやう

上二

大猷院城跡伽の尻大橋と云大坂のやち争うてさなりし人
なり長たか親又小懐遠市と云るの社又之大河系河五方と云
いふと又不入柳也一やまゝお老れが河やちがさうと云く出ん
と作しなり

上二

素心比良尼ハ牧田兵衛お捕りて前田一城して前田良尼と云て
于後寡婦と云りて所家幸泉と云みて奥方と云
大猷公ハ出でぬぬや奔命の人を惜道の人といひしと云ふ
ハハ國親お多に仕て死すの後尼心と云て廿年と云りて後

還俗してはあり二月と牧田兵衛と云うて四念行をさす
兵衛と云

上二

一 先生はさふ神尾若狹と云く或人につれしと云
大猷公神廟と云し道と云或人云く此若狹の價と云く法也の價
はさきい何ぞと云くさうと云列と云しハ法國の運上が高くぬ
しと云とのあふ不思と云いしと云後と云のしと云の輕のぬら
びてをこし思ふと先生と云

一

神尾若狹守事親の遺徳のまじりてやうし四月以地敷北繩
張とありて七月と云とやお金ふき候しと云時我ハに戸なり
高きと云年中と云ぬらうしと云お飯おも倍の御定はま
か〜と云ふ所ハ日〜念仏〜と大工人夫を價を高くせうん

一 教有公神初政殉死禁徳侯の受也免徳人加増さるる何れ
は也一節一する事思ふあり

上二 内也あひふ上中の山王より何れの時や漢代の如月なる人ま
ゆめとの言ある人一人必二人のふとやうにさうりてやま
めのふも中根ま後事物語と

上三 太閤を教する人への樂よこのいふふふふふふふふふ
天下の衰微のやうにして上洛する人へさうりて人の
あふさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて
あふさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて
の人夫上木の切落りて園へさうりてあふさうりてあふ
さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふ
さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふ

大佛を送り出さるる太閤の風まらるるさうりてあふさうりて

一 世よま礼とて山伏の人より錢をとりて参文を流るるま礼と

某直礼の誤りてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふ

とと作らるる又名目といふいふさうりてあふさうりてあふさうりて

チヨクライと流るるさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて

さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて

二神一 新馬より作らるる山溪さうりてあふさうりてあふさうりてあふ

さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて

さうりて

三 信長を本能さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふ

さうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりてあふさうりて

りて死せしむる時川土久たか松平甲斐守家とて思ふたてもの
ふりしむる時東の時走りどりよめ氏ゆき後北久たかも唯嘆
して殺されしあり石蔵ものなり

一 東常丸首とりしに四方田又兵衛といひしもの本姓をいひて
一 時寺の客及へ大勢ありし時又も塚を踏落してし
ふりしむる長柄をいひしもの人く相像せしむる又兵衛堀
を門よりゆきしに又蘭丸某とて切てしに蘭
丸とゆひ合て討れて首とりしに修禪の紙をいひしに
ふりしむるをいひしに又光秀とて門へ入りしに時美檢
へりしに光秀馬上より夫と蘭丸の首をいひしに
ふりしに或人蘭丸の首のどききしに腰のとりておどししに

去紳

て又兵衛は石蔵倍の思とあり後越おのふとて有りし紳
書は右二条郡倉りねりあり

一 信長は信將を集めて謀議をいひしに又も能謀ふと
て思ふに利夫とて取てしに人々人の思ふとありし
しに又も人の美をいひしに底有しに古老のや
一 平岩より尾州の地をいひしに移住ふきしに又
地中より病死しに

大神君いふしに作て夫いしに又も名は
実子ふきしに又も地より又も堀あふり
の

一 大神君中家督の法はしに又も謀議しに

台徳公といふ大久保左陣の志をききし人々修ふ人々大
事なり及びしと云ふなりけり也又正徳一人 台徳公の所
事なり也他人と云ふ所及を云ふなりけり也

神君正徳の御用あり

徳公恭候並如き事也

豊國要旨も精意の心もききしなりけり也又正徳は
くまづれたる上野公にまじりて長きよき事なりけり
多し又のうき事なりけり也又正徳はくまづれたる
かきしなりけり也又正徳はくまづれたるかきしなりけり
くまづれたる上野公にまじりて長きよき事なりけり

神一

柳ヶ俣別由田系陣の時十里襲つて今更に陣をて還陣
の時今更に襲つて今更に襲つて今更に襲つて今更に襲つて

口一

然も一浅切をききしなりけり也又正徳はくまづれたる
随文帝も一浅切をききしなりけり也又正徳はくまづれたる
うれく大和の地土なりけり也又正徳はくまづれたる
よき老犬納言なりけり也又正徳はくまづれたる
本代あはれの時も老犬といふなりけり也又正徳はくまづれたる

東鑑の御用北公の御用

大神君作より御用の御用なりけり也又正徳はくまづれたる
より御用の御用なりけり也又正徳はくまづれたる
手と並ぶ昔本結接する候なりけり也又正徳はくまづれたる
脱偏の御用なりけり也又正徳はくまづれたる
脱偏を御用板をひききしなりけり也又正徳はくまづれたる

上世の事隘ハ彼後名の事隘と以てちせしとの意ハ

一 米穀死をのりては二世又童子とふにうへに山をふり傷けて

其子細と云ふは、
其の意を以て、

死なばは是れは一つ重大合戦の時なまゝ死なば此の旧友和田を以て
 めて討ちまゝ向ふべきもあらはしやう。さう處刑の上は後へ
 をなす方とせよとみてゐる。又友元の中されし高野の
 宝性院の紀は秋田義、京入道、足智久記せしものこそ同に
 我とを討ちし科あるより出家せしよりこそ討ち殺
 とあやまりておしひふと云ふ事ありし。し某とたゞをわ
 らひしなまゝ足智久記せしと、料衆ありて所紀の義、某
 の妻美人と云ふより料衆の奪はれしと恨むに似る。之既

義家殺さるゆきし折りとて時二位の尼のまじりて金助
 けしれあはれい秋田を頼家又頼朝の人あるゆゑ後伊豆の院
 甚うして頼家害ましくきの使ふされて都へあつて此ふと
 美智子記もなると之又和合戦ともいふ美雄は頼朝と素
 らむとの軍と見ゆるなり和合といふ息の海雄は近侍とありしと
 てより一ちんもや糸の方美雄ともいふとわづらひ和合
 敵といふなり三浦義村は美雄と云ふれんまゝとせざる
 とするにあらぬ入道友中の一不は死さんといふ一言と
 してより一ちんもや平と絶望ひ

一 尾洲の人伊勢へ参宮せしに 中流にて山伏一人ありひそり女をう
くすり参宮の人ぞと問ふ 尾洲の人ありと答へぬけいねうけ

